



## 日本組織培養学会

### 会員通信

### 第123号

平成22年2月15日

#### 発行者

\* 坂野 俊宏 (株式会社マンダム)  
伊藤 丈洋 (株式会社細胞科学研究所)

#### \*責任者連絡先

〒540-8530  
大阪市中央区十二軒町5-12  
株式会社マンダム 中央研究所  
研究管理室  
TEL : 06-6767-5024

## 目次

1. 平成21年度第1回幹事会追補資料 .....	浅香 勲 .....	2
2. 日本組織培養学会第83回大会 ご案内 .....	許 南浩 .....	3
3. 平成21年度日本組織培養学会奨励賞受賞者感想文(追加) .....	稲村 充 .....	6
4. 事業仕分けによる理化学研究所バイオリソース事業費削減に 対する反対の意見表明について .....	鈴木 崇彦 .....	6

## 1. 平成 21 年度第 1 回幹事会追補資料

議題：学会会則等の整備、改訂の必要性和、新法人への移行の是非についての議論の資料として同幹事会において浅香勲幹事より提出された文案を以下掲載します。

### 諸規定の改正について

鈴木新会長「就任のご挨拶」でも触れられておりましたが、法人化移行の可否を検討する過程で本会の諸規定を再度見直したところ、これまで本会の慣例となっていた名誉会員の推戴や奨励賞制度が会則上不明瞭であることが判明し、これらの活動の根拠を明確化するため、会則、細則、奨励賞規定の改正を 2009 年度の総会に諮り、諸会員の皆様よりご承認いただきました。

以下に改めて、この会則、細則、奨励賞規定の改正部分をご提示いたしますのでご確認いただけますようお願いいたします。

[会則の改正] (改正部分のみ、下線が改正部)

#### 第2章 目的および事業

第2条 本会は、組織・細胞培養学およびその応用技術の進歩発達に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、本会の目的を達成するためにつきのような事業を行なう。

1. 年1回総会を開く。その他必要に応じて臨時総会を開くことができる。
2. 年1回大会を開催し、学術上の研究成果の発表および知見の交換を行なう。
3. 必要と認められた定期刊行物を発行し、会員に配布する。
4. 学術研究の助成、顕彰、研究者の養成のための資金の支給を行う。
5. 国内および諸外国の関係学術団体および国際団体との連絡ならびに協力をはかる。
6. その他、本会の目的達成のために、必要と認めた事業を行なう。

#### 第3章 会員

第4条 本会の会員は、正会員、学生会員、名誉会員、賛助会員とする。

1. 正会員および学生会員は、組織培養およびその関連領域の研究に従事する個人で、本会の目的に賛同し、定められた会費を納める者とする。
2. 学生会員は、大学の学部、大学院およびそれに準ずる教育機関に学生として在籍し、その証を提出した者とする。
3. 名誉会員は、本会の育成、組織培養の進歩に著しい功績のあった正会員で、幹事会の議決を経た者とする。名誉会員は、会費を納めることを要しない。
4. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、定められた賛助会費1口以上を納める個人または団体とする。

第5条 特別の理由なく、引続き2年以上会費を納入しない正会員は、除名することができる。

[細則の改正](改正部分のみ, 下線が改正部)

## 第7章 表彰

第9条 本会に日本組織培養学会奨励賞を設ける。

第10条 日本組織培養学会奨励賞の選考および授与にかかる詳細な規定は別に定める。

第11条 本会に日本組織培養学会学術賞を設ける。

第12条 日本組織培養学会学術賞の選考および授与にかかる詳細な規定は別に定める。

第13条 本会に日本組織培養学会功労賞を設ける。

第14条 日本組織培養学会功労賞の選考および授与にかかる詳細な規定は別に定める。

[奨励賞規定の改正](改正部分のみ, 下線が改正部)

第5条 応募方法: 演題申込に時に奨励賞応募の旨を明記し、本会評議員の推薦状ならびに履歴書各1通を演題とともに大会事務局に提出する。なお、応募の期限は演題申込締切日とし、応募演題は一人一題に限る。

第6条 選考: 審査員は大会世話人, および本会幹事が審査し、応募時の書類選考に加え、大会発表時の発表技術、理解度、方法論、討論力の優劣により決定する。

第7条 表彰: 本学会の総会時に会長が発表し、賞状ならびに副賞(総額300,000 円以内)を贈呈する。

第8条 改訂: 幹事会で行う。

(浅香 勲)

## 2. 日本組織培養学会第 83 回大会 ご案内

大会世話人: 許 南浩

岡山大学 医歯薬学総合研究科 細胞生物学分野

本年 5 月に日本組織培養学会第 83 回大会を岡山で開催する運びとなりました。岡山での開催は、平成 12 年に難波正義先生が開催して以来となります。その間、iPS 細胞の開発をはじめ、細胞培養の分野では大きな発展がありました。iPS 細胞は、僅かな数の遺伝子の導入によって発生の時空間軸を逆転させるという意味で、私たちの多くが持っているパラダイムの転換を迫るものでした。細胞培養が現実の技術となってちょうど 1 世紀後に、このような一大変革が起こったのも象徴的ではありますが。これを受けて、最近の大会においては幹細胞とその応用に焦点を当てたプログラムが実施され、大きな成果を生んできました。私はその上に立って、本大会では敢えて培養細胞の原点に少しく立ち戻る視点から企画を致しました。特別講演は守屋央朗先生による「生命システムのロバストネス -酵母細胞をモデル系として-」です。生命とは何か、細胞とは何か、ということを変更して考える契機になればと思っております。ワークショップおよびシンポジウムは、「原点から見つめ直す細胞培養研究の標準化」と「In Vitro 組織形成への挑戦」です。後者も、単に応用に繋がればよしとするのではなく、そこから見えてくる細胞の本質に目を向けたいと思っております。

瀬戸内は春がベストシーズンです。懇親会では、富山での大会にならって鏡割りを行います。大いに学問をし、大いに楽しむ、をモットーに大会を運営したいと思います。岡山へ多数の皆様がお越し下さるよう、心より願っております。

## 大会概要

大会名：日本組織培養学会 第83回大会

大会テーマ：「組織培養 100 年、新たなステージへ」

会期：2010 年 5 月 20 日(木)・21 日(金)

会場：岡山大学創立五十周年記念館ホール(岡山大学津島キャンパス)

<http://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/kinenkan-index.html>

## 予定プログラム

特別講演：守屋 央朗(岡山大学 異分野融合先端研究コア)

「生命システムのロバストネス -酵母細胞をモデル系として-

シンポジウム：オーガナイザー 許南浩(岡山大学)

「In Vitro 組織形成への挑戦」

松崎 典弥(大阪大学)

中村 真人(富山大学)

中尾 一久(東京理科大学)

ワークショップ：オーガナイザー 中村幸夫(理化学研究所)

「原点から見つめ直す細胞培養研究の標準化」

小原 有弘(医薬基盤研究所)

檀上 稲穂(理化学研究所)

伊藤 丈洋(細胞科学研究所)

横山 周史(リプロセル)

戸須真理子(ライフテクノロジージャパン)

間中 研一(獨協医科大学)

北嶋 裕幸(理化学研究所)

藤岡 剛(理化学研究所)

Session in English

一般口演

奨励賞演題(口演・ポスター)

### 一般演題・奨励賞演題募集

募集期間:2010年2月12日(金)から3月1日(月)まで、ただし抄録本文のみ3月12日(金)まで修正可能です。大会ホームページよりご応募願います。また奨励賞対象演題に応募される場合は、所定の申請書類の提出(郵送)が必要です。詳しくはホームページでご確認ください。

学会ホームページ <http://jtca.umin.jp/>

または <http://jtca.dokkyomed.ac.jp/JTCA/meet/y2010/index.html>

### 参加費:

	会員種別	大会参加費	懇親会参加費
事前登録の場合	一般会員	6,000円	4,000円
	学生会員	3,000円	2,500円
	非会員	7,000円	5,000円
	学生非会員	4,000円	3,500円
当日登録の場合	一般会員	7,000円	5,000円
	学生会員	4,000円	3,000円
	非会員	8,000円	5,500円
	学生非会員	5,000円	4,000円
	名誉会員	全額無料	

事前登録は4月30日までに、同封の振替用紙もしくは大会ホームページにご用意した雛形を模して、ゆうちょ銀行よりお振込ください。

会場案内や宿泊の斡旋などについては、大会ホームページに順次掲載いたしますのでそちらをご覧ください。

### 大会事務局

岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 細胞生物学分野

〒700-8558 岡山市北区鹿田町 2-5-1

TEL: 086-235-7394 FAX: 086-235-7400

担当 片岡 健 ([kenk@md.okayama-u.ac.jp](mailto:kenk@md.okayama-u.ac.jp))

### 3. 平成 21 年度日本組織培養学会奨励賞受賞者感想文(追加)

大阪大学大学院薬学研究科分子生物学分野

稲村 充

この度は日本組織培養学会第82回大会において、「未分化ヒト ES 細胞から中内胚葉へのラミニンによる分化促進効果」に対し奨励賞を授与いただき誠にありがとうございました。私自身、細胞培養経験がまだまだ浅いため、これを期に精進していきたいと思えます。

近年、ヒト胚性幹細胞(ES 細胞)に加え、人工多能性幹細胞(iPS 細胞)の樹立が報告され、薬物の in vitro 毒性評価系の構築や移植治療による再生医療への応用に期待が高まりつつあります。ヒト ES 細胞や iPS 細胞をこのような目的に応用していくためには、厳密に定められた条件下で培養し、分化誘導技術を開発することが重要です。しかしながら、これまでどのような培養環境、特に細胞外基質が組織特異的な分化を促進するかに関する情報はほとんどありませんでした。今回、未分化なヒト ES 細胞から中内胚葉系細胞や内胚葉系細胞への分化過程においてラミニンが分化促進効果を示すことを明らかにしました。過去の分化誘導研究の多くが、フィーダー細胞やマトリゲルなど動物性タンパク質を豊富に含み、組成が不明な培養条件下で行っているのに対して、我々の方法は全て化学的に組成が明らかな培養条件下で中内胚葉系細胞や内胚葉系細胞へと分化誘導できることから、ヒト ES 細胞を用いた創薬や再生医療への実現化に向けて大きな一歩を踏み出すことができました。また、我々の分化誘導系は組成の明らかな条件下で培養しているため、液性因子や細胞外基質等の効果を検討するのに最適な系であると思われれます。さらに我々は、このような組成の明らかな培養条件が応用面ばかりではなく、様々な基礎研究の発展に繋がることも期待しています。今後は内胚葉系細胞から肝細胞や膵細胞などのより機能性の高い細胞への分化過程においてどの細胞外基質が適しているかを明らかにしていきたいと考えております。

最後になってしまいましたが、大阪大学大学院薬学研究科分子生物学分野教授・独立行政法人医薬基盤研究所遺伝子導入制御プロジェクトリーダーの水口裕之先生、細胞資源研究室研究リーダー古江-楠田美保 先生のご指導、ならびに独立行政法人医薬基盤研究所遺伝子導入制御プロジェクトと細胞資源研究室研究のスタッフの方々の協力なしには本研究を進めることはできなかったと思えます。深く感謝申し上げます。

### 4. 事業仕分けによる理化学研究所バイオリソース事業費削減に対する反対の意見表明について

会員の皆様もご承知のとおり、政府による事業仕分けは科学分野予算にまで及んでおります。特に私どもの研究に密接に関連するバイオリソース事業に対する予算の削減については、幹事の先生方にお諮りし、下記のとおり、当学会として明確に反対の意志を表明致しました。

(鈴木崇彦)

日本組織培養学会  
The Japanese Tissue Culture Association

内閣総理大臣 鳩山由紀夫 殿

内閣副総理大臣兼科学技術担当大臣 菅 直人 殿

文部科学大臣 川端達夫 殿

日本組織培養学会は、理化学研究所のバイオリソース事業の予算削減につき強く反対の意を表明いたします。

細胞や遺伝子、遺伝子改変動物などのバイオリソースを整備・保存することは医学・生物学研究にとって必須であり、大変重要な意義を有しています。日本において先達らが創出・保存してきた生物資源は、貴重な動物やヒトの臨床サンプルを基にしたものであり、商行為などの利益を目的にしたものではなく、国として保存していくべき大事な資源であります。バイオリソース事業によって収集・保存されることにより、これらの資源は散逸や消滅を免れ、さらには分類、系統化、評価が加えられ、研究者に配布されてきました。研究者は激しい国際競争の中で、正しい評価を与えられたこれらの生物資源を利用することにより、研究成果を公表するに当たって厳密さが要求される生物資源の品質管理に時間的・経済的に煩わされることなく研究に邁進することができます。もし、現在のバイオリソース供給システムにおいて受益者負担が増すということになれば、これらの生物資源を個々の研究者が独自に保持する傾向が強くなると予想されることから、逆に日本の科学研究費全体の中に占める生物資源維持費の増大を招き、さらにそのような場合においては生物資源の品質管理が疎かになることによって研究成果自体の信憑性が揺らぎかねず、ひいては国際競争力を低下させることが強く懸念されます。

今後、特許などによる生物資源の国際間の囲い込みにより、自由な発想に基づく生命科学・生物学研究の障害が懸念される中、日本独自のバイオリソース事業は益々重要性を増していくと考えられ、国の支援による安価で正しく評価された生物資源の供給は、日本から発信される研究成果の質・量を高める基盤となります。

以上のことから、バイオリソース事業予算が大幅に削減されるようなことが無きよう、再検討していただきたく、よろしくお願い申し上げます。

平成 21 年 11 月 27 日

日本組織培養学会

会長 鈴木崇彦

東京大学大学院医学系研究科

東京都文京区本郷7-3-1

TEL 03-5841-3598 FAX 03-5841-3477

## 【編集後記】

本会員通信では岡山にて開催される第 83 回大会のご案内を掲載させていただきました。「培養細胞の原点に少しく立ち戻る」という許先生のお言葉にもあるように細胞が培養され始めて 1 世紀という歴史を振り返る機会として、鏡割りとともに心から楽しみにしております。(ti)

年が明けるとあっという間に月日が経ちます。大学、研究機関の先生方もそうですが、3 月期決算の企業に勤める我々もこの時期、今年度の総括・収支報告と来年度の計画立案、予算申請、組織改変、人事異動…と、会議や打合せ、事務作業や資料作成が何かと湧いて出て参ります。今のご時世、忙しいのは幸せなのだと自分に言い聞かせております。(ts)